

。ときめきリーフノベル

刺青師の言葉

文・高安義郎
絵・芝 章一

* リーフノベルとは…原稿用紙4枚分、つまり1600字以内に収める超短編小説で、新しいジャンルです。

良太は刺青師を尋ねた。背中に豹の模様を彫りたかったのだ。

刺青師は言つた。

「なに豹だと？」

「はい豹です。あの冷たい面構えと強靭な肢体。ぼくの憧れなんです」

良太は熱っぽく語つた。

良太が豹を好きになつたのは三年ほど前だった。きっかけは果敢にシマウマを襲うドキュメンタリー番組を見た時からだが、なぜこれほど好きになつたのか自分でも判らない。日本中の動物園を尋ね歩いては何枚も写真を撮り部屋中に貼りつけたりした。やがて写真では物足りなくなり、自分自身が豹になりたくなつたのだ。刺青師は言つた。

「わしは浮気の手伝いなどせん」

「いいえ浮気ではありません。豹と一緒に居るのが生きがいなんです。お金なら大丈夫です」

良太は刺青師を尋ねた。背中に豹の模様を彫りたかったのだ。

刺青師は言つた。

「なに豹だと？」

「はい豹です。あの冷たい面構えと強靭な肢体。ぼくの憧れなんです」

良太は熱っぽく語つた。

良太が豹を好きになつたのは三年ほど前だった。きっかけは果敢にシマウマを襲うドキュメンタリー番組を見た時からだが、なぜこれほど好きになつたのか自分でも判らない。日本中の動物園を尋ね歩いては何枚も写真を撮り部屋中に貼りつけたりした。やがて写真では物足りなくなり、自分自身が豹になりたくなつたのだ。刺青師は言つた。

「わしは浮気の手伝いなどせん」

「いいえ浮気ではありません。豹と一緒に居るのが生きがいなんです。お金なら大丈夫です」

「金の問題ではない。お前の気持ちが浮わついておるのが見えるんだ。わたしは誤魔化されんぞ」

「違います。信じてください」

「それでは三月考えろ。それでも変わらなかつたらその時は考えてやる」

そう言われて良太は三月考えた。これは彫り師が言うように浮気なのだろうか。自問したが、時間が経つに連れ豹になりたい願望は膨れてゆくのだった。そんな一途な心を良太は本物だと確信した。

「やはり決心は変わりません。後悔はしません。もし諦めたら逆に一生後悔すると思います」

良太は刺青師に言つた。

「そこまで言うのならないだろう。本物の心とは決して消えない心だぞ」

良太の目は輝いていた。

それから数ヶ月が過ぎた。毎週決まった曜日には一切の残業を断り、豹の花柄の斑点を彫つてもらいに刺青師の所に通つたのだ。気が張つていたからだろうか、話に聞いていたほどの痛みを感じなかつた。なぜかむしろこそこばゆかった。三月ほど経つた夜、彫り師は言つた。

「よく通つたものだな。豹の模様は今

ことにしよう。それまで皮膚を整えるといい」

良太は家に帰ると服を脱ぎ二枚の鏡を合わせてみた。良太の目には精悍な豹の模様が背中一面を覆つていた。

「ああ、とうとう僕は豹になれるぞ」

目には感激の涙が止めどなく流れた。良太の日々は見違えるように変化した。自分自身に気力が湧いて来るのを感じていた。仕事は順調にこなし課内トップの業績を上げたりした。半年程が過ぎたある日のことだった。良太の心に異変が起つた。偶然友人に誘われて見たドキュメンタリー映画『草原の王者』で、草原を王者のように走り鹿を追う虎の姿を目にしたのだ。虎の引き締まつた胴体。バネのよくなしなやかなフットワーク。そんな虎に比べると豹は猫のようしさえ思えてきたのだ。良太はさつそく刺青師を尋ねた。良太の目は輝いていた。

良太は家に帰ると服を脱ぎ二枚の鏡を合わせてみた。良太の目には精悍な豹の模様が背中一面を覆つていた。

「でも僕は今の自分の心に正直に生きたいんです」

「卑怯者め。『自分に正直』と言う言葉は、浮気心に流された心を正当化する隠れ蓑だ」

「そんなことより豹の刺青、消せないでしようか」

「恋と同じだ。相手に与えた心の傷はどうするんだ。どうせお前はまた心変わりをするだろう。そんな事もあるうかと思つて一年間消えない塗料で画いた豹だ。とつと帰れ」

はねつけられ、すごすごと家に帰つた良太は裸になり鏡を見ると、なるほど肩の辺りは少し禿げ初めシマウマのような情けない姿に変わつていた。

日が経つ程に豹柄は剥がれ落ちていつた。無残な模様を見つめながら、豹の何に憧れていたのだろう。豹を恋する心に恋していただけなのだろうか。そう思うと良太は大きな溜息をつき、今更ながら刺青師の言葉の重さを感じなかつた。

「決心は変わらないと言つただろ」

「ええ、あの時は本心でした。でもぼくが本当に幸せになれるのは虎だと悟つたんです。今度こそ本物です」

刺青師は言つた。

「浮気心か本心かは恋と同じで後に

なつて分かるものだ。熱に浮かされている時は本心と思い込んでいるだけだ。本物というのは、本物に育てる心のことなんだ」

「でも僕は今の自分の心に正直に生きたいんです」

「卑怯者め。『自分に正直』と言う言葉は、浮気心に流された心を正当化する隠れ蓑だ」

「そんなことより豹の刺青、消せないでしようか」

「恋と同じだ。相手に与えた心の傷はどうするんだ。どうせお前はまた心変わりをするだろう。そんな事もあるうかと思つて一年間消えない塗料で画いた豹だ。とつと帰れ」

はねつけられ、すごすごと家に帰つた良太は裸になり鏡を見ると、なるほど肩の辺りは少し禿げ初めシマウマのような情けない姿に変わつていた。

日が経つ程に豹柄は剥がれ落ちていつた。無残な模様を見つめながら、豹の何に憧れていたのだろう。豹を恋する心に恋していただけなのだろうか。そう思うと良太は大きな溜息をつき、今更ながら刺青師の言葉の重さを感じなかつた。

